

滋賀県大津市坂本方言における 身体感覚を表すオノマトペ

橋 幸男

○はじめに

1. 調査対象地

位置：滋賀県大津市坂本は、大津市の中心部から北へ約8キロ、比叡山の麓にある。

歴史：坂本は比叡山延暦寺の台所を預かる町、日吉大社の門前町として栄え、琵琶湖岸の坂本港は都への交通の中継地となっていた。したがって、多くの物資が坂本へ集められ一大商業地として繁栄した。紅葉の名所としても名高い日吉大社の他に、聖徳太子によって創建された西教寺もある。

中世には比叡山麓から湖岸までの広い範囲が坂本の名で呼ばれていたが、近世に入ると、山麓の坂本村、湖岸の下坂本村、比叡辻村と分かれた。明治以後は地域的なまとまり（小学校区）としては、山麓の坂本地区と湖岸の下坂本地区の2つになった。今回の調査対象地（坂本5丁目および6丁目）は坂本地区に含まれる。

生業：坂本は、昔からの町と、宅地開発による住宅街とがあるが、多くがサラリーマンとして大津・京都方面等に勤めに出ている。

交通：京阪電気鉄道石山坂本線の終点が坂本駅である。大津市の浜大津駅から15分。JRは湖西線の叡山駅がある。京都駅から普通電車で17分。比叡山への坂本ケーブルの起点でもある。

人口：大津市の人口は、265,111人。坂本は9,968人。そのうち、坂本5丁目は830人、6丁目は1,970人である。（平成3年11月末日現在）

世帯数：大津市は88,680世帯。坂本は3,395世帯。そのうち、坂本5丁目は368世帯、6丁目は649世帯である。（平成3年11月末日現在）

その他：坂本は、里坊と呼ばれる寺と石積みのある門前町として、昔ながらの町並みが残されている。

2. 調査年月日 1991年（平成3年）11月17日

3. 話者 辻田きみ 女 1924年（大正13年）3月30日生まれ 67歳
浅野すゑ 女 1924年（大正13年）11月11日生まれ 67歳

4. 調査者 橋 幸男

調査場所 話者の自宅。すなわち、坂本5丁目の辻田きみ宅、および6丁目の浅野すゑ宅。

5. 調査方法 質問法による。

○語形と文例の記し方

- (1)・語形は、質問紙の順番にそって、共通語と、それに対応する坂本方言とを記す。使用頻度が高いと思われるものを前の方に記す。
 - ・共通語をひらがな、坂本方言をカタカナで記す。
- (2)・同音の繰り返しの語は、<ガタガタ>のように記す。これらの語は、ガタガタのようにトを伴うことが多い。
 - ・同音の繰り返しでない語で、必ずトを伴うことになっている語は、<スイット>のように記す。
 - ・同音の繰り返しでない語で、必ずしもトを伴うことになっていない語は、<サッパリ>のように記す。
- (3)・文例は、○印を付けて、それぞれの語形の後に記す
 - ・説明は、※印を付けて、それぞれの語形や文例の後に記す。いくつかの語形をまとめて説明することもある。

I 全身の感覚

- 1-1 快不快 さっぱり=スイット、スット、スーット、サッパリ、サーッパリ
○ヲロエ ハイッテ スイット シタ。
- 1-2 寒さ がたがた=ガタガタ、ガッタガッタ、ゾクゾク
ふるふる=ブルブル
ぞくぞく=ゾクゾク、ゾーット
○カゼデモ ヒータンカ、カラダガ ゾーット スルワ。
すうすう=ゾガゾガ、ゾーガゾガ、ゾクゾク、ゾークゾク
〔スーシューは使わない。〕
○セナカガ ゾガゾガ スル。
※ゾクゾクは、がたがた震えている状態を表すとともに、全身や背中に寒さを感じている様子などにも、頻繁に使う。
- 1-3 熱さ ぼかぼか=ホカホカ、ホッカホッカ、ホカホカ、ホッカホッカ
かつか =カッカ、カーット

II 皮膚の感覚

- ひりひり=ヒリヒリ、ヒーリヒリ、ビリビリ、ピーリビリ
べたべた=ベチャベチャ、ベタベタ
むずむず=ムズムズ、モソモソ、ヒリヒリ

※ヒリヒリは、不快感が強い場合や、痛みを伴う場合などに使う。
かさかさ=カサカサ、カサカサ

すべすべ=ツルツル、スルスル [スベスベは使わない。]

○ハダガ スルスル スル。

ずきずき=ズキズキ、ズキンズキン、ピリピリ

○アシオ ウツテ ズキズキ スル。

○ウンダ 下キ ズキンズキン スル。

○キズグチガ ピリピリ イタイ。

※ズキズキ、ズキンズキンをいろんな場合に多用する。傷が膿んだ時の痛み、足を強打した時の痛みなどである。足を強打した場合は、ズキンズキン(強調的な言い方)よりも、むしろズキズキを使う方が多いようである。

ひりひり=ヒリヒリ、ピリピリ

○ピリピリ ユー下 イトオスワナー(痛いすわなあ)、ヒリヒリ
ユー下 ソーワ(そんなには) イタイ コト ナイト ユー イ
ミヤト(意味だと) オモイマスデー。

※ヒリヒリよりもピリピリの方が痛みがひどいということである。

ずきんずきん=ズキンズキン、ズキズキ

ぼとぼと→これに該当する語はない。

Ⅲ 頭部の感覚

3-1 頭

がんがん=ズキズキ、ズキンズキン、ガンガン、ガーンガン、ガーンガ
ニン

○アタマノ オクノ ホーガ ズキズキ スル。

○ズキズキヨリモ ガンガンノ ホーガ ヒドイ。

※強さの順は、ガーンガーン(強) > ガーンガン > ガンガン >
ズキンズキン > ズキズキ(弱) であると思われる。

くらくら=クラクラ、クーラクラ、クーラクーラ、フラフラ、フーラフ
ラ

ずきずき=ズキズキ、ズーキズキ、フラフラ、フアーット

3-2 顔面 かつか =ポット、ポーット、ポット、ポーット、カッット、カツカ

3-3 目 ちかちか=シカシカ、チカチカ

○テレビ ミスギテ、メガ シカシカ スル。

しよぼしよぼ=シヨボシヨボ

○ケムタイ 下キ、メガ シヨボシヨボ スル。

○ミニクーテ メガ ショボショボ スル。

※ショボショボは、煙たい場合だけでなく、ものが見えにくい場合にも使う。

ごろごろ = シカシカ、チカチカ 【ゴロゴロは使わない。】

○ゴミガ ハイッテ シカシカ スル。

○チョッチョッチョット (僅かに) イタイ 下キ、シカシカ スル
ユ コト イイマスワナー。

3-4 耳

きーん = ガーン、ガンガン 【キーンは使わない。】

じーん = ジーン、ジン

じくじく = ジユクジユク、ジクジク

3-5 鼻

むずむず = ムズムズ

ぐじゅぐじゅ = グジュグジュ、グチュグチュ、グチュクチュ

つーん = ツン、ツーン

3-6 口

(口全体) ねちゃねちゃ = ネチャネチャ、コチャコチャ、ゴチャゴチャ、ヌルヌル

○ナットー (納豆) タベルト クチガ コチャコチャ スル。

※ネチャネチャ、コチャコチャ、ゴチャゴチャは粘り付くような感じ、ヌルヌルは、粘りがあっても、表面的な滑らかさが伴う感じを表す。

(歯)

がちがち = ガタガタ、ガチガチ

ずきずき = ズキズキ、ズキンズキン

ちくちく = チクチク、シユクシユク、シクシク

※チクチク、シユクシユク、シクシクは軽い痛み、ズキズキ、ズキンズキンは重い痛みを表す。

※ズキズキは、からだ全体、頭、歯の痛みや、軽い不快感などを表すのに頻繁に使う。

(舌)

ひりひり = ピリピリ、ヒリヒリ、ヒーヒー

○モノスゴイ カライトキワ ピリピリヤシネー、チョットシタ カラサヤッタラ ヒーヒーヤネー。

※辛さの順は、ピリピリ (強) > ヒリヒリ > ヒーヒー (弱) であると思われる。

3-7 喉

からから = カラカラ

いがいが → これに該当する語はない。ハシカイ、エグイという形容詞を使う。

ぜえぜえ = ゼーゼー、ジェージェー

IV 胴体の感覚

4-1 肩 こりこり=キユット、キユートット 【コリコリは使わない。】

○カタガ コツテ キユートット ツマル。

※オノマトペではないが、肩が凝ることは、「カタガ ツマル。」と
言うことが多い。

4-2 胸 ときどき=ドキドキ

ときんときん=ドキンドキン

とくんとくん→これに該当する語はない。

きゅっと=キユット、キユートット、ギユートット

むかむか=ムカムカ

4-3 腹

(空腹) ぐうぐう=グーグー、ゴロゴロ

○オナカガ スイテ、ゴロゴロ ユー。

きゆるきゆる→これに該当する語はない。

(満腹) たふたふ=ダブダブ、ゴロゴロ

○タバスギテ ゴロゴロ スル。

ばんばん=キンキン、パンパン 【パンパンは使わない。】

○オナカガ キンキンニ ナッタワ。

(腹下し) ごろごろ=ゴロゴロ、ムカムカ

○オナカガ ゴロゴロ トール。

ピーピー=ピーピー、キユートット

○シタバラガ キユートット スル。(痛い時)

※ゴロゴロはいろいろな場合に使う。空腹時はグーグーという音感を
「ゴロゴロ ユー」で表し、満腹時は、腹にいろんなものかいつば
い詰まっとうごめいている感じで「ゴロゴロ スル」と言い、腹下
しの時は「ゴロゴロ トール」と言う。

4-4 胃 しくしく=シクシク、キユートット、ムカムカ

※シクシクはかなり重い痛みの時に使う。

きりきり=キリキリ

4-5 尻 むずむず=ムズムズ

もぞもぞ=モゾモゾ、モドモド

V 手足の感覚

手 ぶるぶる=ブルブル

足 がくがく=ガタガタ、ガクガク

○アルキスギテ アシガ ガタガタ スル。
その他 ぬるぬる=ヌルヌル

VI 関節（骨）の感覚

ごきごき→これに該当する語はない。

ぐきぐき=グキグキ

ばきばき=ボキボキ、ポキン、ポキット 【バキバキは使わない。】

○ホネガ ポキット オレソーヤ。

VII その他

シカシカ

○ムシニ カマレテ シカシカ スル。

○セナカニ キノ エダガ ハイッテ、ハダガ シカシカ スル。

※目がちかちかする様子、目がごろごろする様子の他に、シカシカは、皮膚に不快感を催す場合にも使う。

○まとめ

上記のものは、被調査者2人の回答で出てきたものを延べて記録したものであるが、被調査者2人の答えには多少の違いがある。オノマトペは、ある意味では個人的な要素が強いのであるから、当然と言ってよからう。

全体的に見ると、全国共通語と比べて、坂本方言に特に珍しい言葉があるわけではない。特定の分野の言葉が多いというわけでもない。とは言え、語彙は豊富であって、程度によって使い分けるといふものがある。ただし、品位の差や、使用場面による使い分けは感じられない。

語形に促音が入るもの（例えば、ホカホカがホッカホッカとなる）や、長音化するもの（例えば、クラクラがクーラクーラとなる）の例は多いと思われるが、すべての場合を確かめたわけではない。上に記しているもの以外にも現れると思われる。

強調形の特徴としては、反復は2回（例えば、ガタガタ フルエルが、ガタガタ ガタガタ フルエルとなる）である。また、第1音節の母音が1拍分のびる（例えば、サッパリがサーッパリとなる）ことにより強調することがあるが、長音化が必ず強調の意を表すとは言えないようである。促音が加わるものについても同じである。

（たちばなゆきお 兵庫県立明石西高等学校）